



百合子の筆おろし

福利厚生男性用チケット

大手企業といわれる総合商社、クレシータに勤めて約半年。成長という名にふさわしく、躍進やくしんを続けるこの会社に入社できたことを、本当にありがたいと思っている。クレシータは、離職率が低く募集される人数が少ない為、入社すること自体が難しい。

年齢、二十三歳。真面目に勉強だけを頑張って有名大学に入り、クレシータに入社したものの、いまだ童貞。

いわゆる彼女いない歴年齢の飯島修いじまおさむは、給料明細と共に茶封筒に入っていたよくわからない紙切れを見つめていた。

（福利厚生男性用チケット？）

コピー機で印刷された、チケットと呼ぶには質素で味気ない一枚の紙。A4の給料明細と同じサイズの紙には、大きな文字でそう書かれていた。でかでかと書かれた文字の下に、注意事項が載っている。

『・秘密保持規約を厳守する事。

- ・福利厚生二課の指示に基づき、ルールを順守する事。
- ・チケットの有効期限は、翌給料日までとする。
- ・使用方法については、直属のチューターに尋ねる事。
- ・その他、質問は総務部・福利厚生二課まで。』

（なんだろう、これ？）

「お疲れ、飯島。ああ、もうそんな時期か」

「お疲れ様です。何ですか、これ」

机に座って、じっと紙を見ていた飯島の前に三歳年上の田中がやって来た。田中はニヤニヤと笑みを浮かべている。その顔から、田中がこの紙きれの意味を知っているのだろうと察した。田中は飯島のチューター、つまりは教育係だ。

「田中さん、知ってるんですか？」

福利厚生男性用チケットと書かれた紙を、差し出して問う。「当たり前だろう」と言っていた田中が、飯島の隣に座った。

「飯島、お前昼からの予定は？」

田中に聞かれて飯島は、午後の業務予定を伝えた。なんてことはない。飯島は商品開発部に所属してはいるが、まだ新人で事務的な仕事が多い。最近少し田中の仕事について回っているが、基本的にはオフィスのパソコンと格闘する毎日だ。

「そっか。じゃあ、昼飯終わったら、俺に付き合え。いいとこに連れてってやる。……あ、チケット忘れるなよ」

「あ、はあ……。わかりました」

総務部・福利厚生二課の男たちの楽園

昼休みのあと、飯島は田中に連れられて、本社ビルの地下にやって来た。福利厚生二課は地下にあると聞いていたが、行ったことがない。

エレベーターを降りて、地下一階の手前から一つ目。

『福利厚生二課』と書かれたドアの前で田中が立ち止まった。ノックすると、中から「どうぞ」と声が聞こえてきた。田中がドアを開く。

部屋の奥には大きな机が一つ。その手前に、応接スペースのような対面のソファとテーブル。奥の机には、三十代半ばくらいだろうか、綺麗に髪をまとめ上げた女が座っていた。

（すっげー、美人。こんな人、会社にいたんだ……）

「あら、田中君、いらっしやい。新しい子？」

立ち上がった女が飯島と田中の前に歩み寄ってくる。十センチほど高さがありそうな

ピンヒールのエナメルパンプス。黒い艶のあるパンプスの底からはチラリと派手な赤が見えた。すらりと伸びた長い足に、膝上十センチ以上の短いタイトスカートが良く似合っている。

大手企業であるクレシータに似つかわしくないといえ、彼女に失礼なのかもしれないが、どこか夜のお店のママみたいなエロティックな雰囲気を感じていた。

タイトスカートから覗く、ストッキングに包まれた足は、細くもなく太くもなく絶妙な肉付きだ。太ももの上に目をやれば、張り出した外国人のような尻がスカートの布にびっちりとおさまっている。

「どうも、西城麗華^{さいじょうれいか}さん。いや、福利厚生二課、課長。一か月ぶりです。うちの新人が、チケッ^{チケッ}トを貰ったんで連れてきました」

「そう。ってことは、半年たった子なのね。名前は？」

ドアの前に立つ飯島を見た西城の視線が、上から下まで批評でもするみたいに移動する。応接セットの片側のソファに座った西城がやんわりと微笑む。ゆったりと魅力的な

足が交差する。

ただでさえ短いスカートの裾が、太ももの上部へと引き上がる。艶めかしい足に、女性に対しての耐性がない飯島の視線は釘付けになった。

「あ、あの、営業部に配属されました、飯島修です。えっと、あの西城課長。俺、何にも知らなくて……」

「ああ、大丈夫だから、飯島。そんなに構えるな。そんなわけで西城課長、あとはお願いします。じゃあ、俺行きますから」

「わかったわ、田中君。今日は使わないのね。また、いらっしやい。……飯島君、そこに座って」

地下一階に連れて来られた意味も、チケットの意味も全くわからない。課長というのだから、西城は新人の飯島より立場が上の人間だ。

まあ、入社半年の飯島からすれば、社内にいるほとんどの人間が、自分より先輩か上司ということになる。飯島は黙って言われたとおりに向かいのソファに腰を下ろした。

「まず、チケットの説明をするわね」

クレシータの地下一階。総務部・福利厚生二課。

そこは、クレシータに勤める男性社員全員のオアシス、つまりは楽園である。

月に一度、給料明細と共にランダムに配布される福利厚生チケットは、オアシスを利用するためのチケットなのだと西城が言った。

総務部は、本来の総務の仕事をする総務一課、福利厚生一課、福利厚生二課、福利厚生三課、と四種に分かれている。その中で福利厚生二課は男性社員のための特殊な課となっているらしい。

「飯島君、口は堅いか、とか面接で聞かれたでしょう？ 福利厚生二課は、口を割らない男性社員のストレスを癒す場所なのよ」

「はあ……」

「さてと、どの子がいいか選んでちょうだい。ああ、飯島君、こういうのは初めて？」
前かがみになって、アルバムのようなものを差し出した西城の胸元から、豊満なバス

トの谷間が覗く。ゴクリと喉を鳴らして、飯島はその深い溝を凝視した。

「こーら。飯島君、聞いてる？　おーい」

「あつ、ああ、すみません。えっと、なんでしたっけ？」

「もう、だからね、この写真から好みの子を選んでちょうだい」

目の前で手を振られて、飯島はやつと西城の谷間から視線を外した。口は堅いか。確かに面接のときに聞かれた気がする。

表紙を開いた西城が、ページを捲るように飯島に言った。

一枚ずつ捲ってみると、女性の顔写真と共に3サイズや、プロフィールが並んでいた。

『お姉さま系』『妹キャラ』『痴女系』『人妻』などタイプ別の文字と共に、できる事などが詳しく書かれたそれは、女性一人に対して一ページの割合で事細かに記されていた。

「あのっ、西城課長。これって……」

「ふふ、そうよ。ね、風俗店みたいでしょう？　福利厚生二課は男性社員の士気を高める課なの。つまりね、好きな相手とそういう事ができちゃうってこと。いい会社でしょ

う？」

言いながら西城がにこやかに笑う。西城いわく飯島が勤めるクレシータには、外部に知られていない秘密の部署として福利厚生二課がある。福利厚生二課は、表向きには総務の仕事をしていることになっているらしい。

福利厚生二課は、男の欲求を満たすことができる部署。あらゆる性癖を網羅することができるよう、所属している女性社員はそれぞれのキャラクターや特技を生かし、男性社員に奉仕をする。

サービスを受けた男性社員の支払いは、飯島が午前中に見ていたチケットで行う。チケットの配布については毎月一枚と決まっているわけではなく、勤務態度や会社に対する貢献度など内密な項目によって査定され、その上で配布枚数が決まるらしい。

つまりは、仕事を頑張れば頑張るほど、福利厚生二課が利用できる仕組みになっている。

西城からの説明を聞いてチケットの意味を理解はしたものの、女性経験が皆無ともい

える飯島は、誰を選んでいいのか困ってしまった。はっきり言って、こんな状況になること自体が飯島の人生の中で初めてなのだ。どうすればいいのかわからない。

「あの……、えっと……、俺……」

「あら？ もしかして、飯島君、未経験？」

口籠り俯いていた飯島の様子から察したのだろう。西城は飯島に女性経験がないことを言い当ててきた。

（カッコ悪……）

恥ずかしくて、顔なんて上げられない。膝を見つめたまま飯島は固まった。顔も耳も熱い。

「ふふっ、大丈夫よ。じゃあ、私のおすすめでいいかしら？」

「……はい」

「百合子、お願い」

飯島が頷くと、ソファから立ち上がった西城が奥のドアに向かって声をかけた。

カチャリと音がして、扉が開く。現れたのは、西城と並んでも引けを取らないほど艶のある女だった。胸くらいまでの緩くバーマのかかったダークブラウンの髪を片側に集めて掻き上げている。左側の隙間から覗く項に、小さなほくろが見えた。

「麗華さん、呼びました？ あら。君、新人くん？」

グレンチェックのスーツにフリル付きのシャツ。セクシープレスの入ったパンツ。

西城もかなりの美人だが、百合子も負けてはいない。卵型より少しすっきりとした面持ちで、適度にくらみのある唇にはコーラルオレンジの口紅がひかれている。

「ええ、そうよ。百合子、筆おろし得意でしょう？ リードして上手くやってあげてちょうだい」

（筆おろし……）

百合子は西城より五歳ほど若いように見える。筆おろしという西城の言葉に、飯島はスラックスを握り締めた。

コツコツと小さな音をたてて百合子が近づいてくる。ちらりと視線を向けたら、百合

子と目が合った。

「ふふっ、そんなに緊張しないの。名前は？」

「い、飯島です。飯島修」

「飯島君ね。じゃあ、行きましょう。麗華さん、鍵貰えますか？」

百合子は飯島に向かってスツと手を差し出してきた。無意識に伸ばした手を、クイと引く張られる。ソファから立ち上がると、西城が百合子の手の中に鍵を落とした。

「行くわよ。経験したことないくらい、よくしてあげる」